

# 「てしまう」と「ない」との共起について

橋 本 修・松 本 哲 也

キーワード：「てしまう」、「ない」、「ず」、否定、対極表現

## 要 旨

現代日本語の「てしまう」が、否定形式(主として「ない」、加えて「ず」と共起しにくいことを明らかにした。主節・従属節の区別においては、主節中の場合、特に「ない」が命題内否定として働く用例が極端に少ないことが目立つ。比較のため調査した「ている」と「ない」との共起に比べ、「てしまう」と「ない」との共起は、「てしまう」と「ている」との総用例数の違いを勘案しても、(主節においても従属節においても)かなり少ないと言える。一般に否定対極表現にくらべ肯定対極表現は数も少なく、それを対象にした研究も少ないが、本研究はある種の環境における補助動詞の一部が肯定対極表現に近い分布を持つことを示し、他の補助動詞にもこのような性格をもつもののある可能性を示した。

## 1. はじめに

日本語において、もっぱら否定表現と共起し、肯定表現とは共起しない、あるいはしにくい表現が知られている。「けっして」「めったに」「ひとつも」「～しか」「ろくな」などのこれらの表現は、「否定と呼応する表現」「否定対極表現」などと呼ばれ、それなりの注目を集めてきた。一方、否定表現と共起しにくい表現は、管見のかぎりではその数自体が少なく、それを対象とした研究もあまり見あたらない。例えば、包括的な日本語文法書にも、否定対極表現は明記されても、肯定対極表現には触れられないのが普通である。これは例えば英語でも同様のようであり、太田1980(第7章、否定対極表現)でも、

ちなみにもっぱら肯定の文脈で用いられる肯定対極表現(would rather, a good deal, 程度を示す pretty, rather, somewhat など)もある。否定対極表現にくら

べて肯定対極表現は数も種類も乏しい。

(p.281, 114～116)

とある。

しかし、数は少ないものの、否定表現と共起しにくい表現も存在する。上掲の太田1980中の表現にあたるような日本語として、「かなり」「ある程度」などの程度表現が思い浮かぶが、これらの一部には否定と共起しにくいものがある。

(1) 太郎はかなり疲れていた。

(2) ?太郎はかなり疲れていなかった。

否定対極表現にも複数の異なった性質のものがあるように(太田1980, Kato1985他参照)肯定対極表現にも各種のものがあると思われるが、その違いをおいて単純に「否定表現と共起しにくい表現」を探すと、程度表現等とは別に、「てしまう」などの補助動詞の一部にも、それに当てはまるのではないと思われるものが出てくる。本稿は、主として『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』のデータをもとに、「てしまう」が否定辞「ない」とどの程度共起しているのかという調査を行い、それが意味するものについて考える。

## 2. 調査の概要

調査の概要は、「『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』の、日本人作家作品全て(論文末尾「用例資料」参照)から、「てしまう」と、(比較のため)「ている」を全て抜き出し、「ない」との共起数を見る」というものである。より具体的には、

- a 『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』の該当テキストから「てしまう」と「ている」を、すべて抜き出す。参考のため「ておる」についても同じことを行う。  
(ただし、「ている」「ておる」については一部調査を省略している\*1。)
- b 抜き出された「てしまう」「ている」「ておる」を、
  - ・主節内か従属節内か\*2
  - ・主節内のものに関し、述部全体の語形がどのようなになっているか(下接している形式がどのようなものか)
  - ・否定形式(主として「ない」、まれに「ず」)の機能の種類(単純な命題内否定か、モダリティ内否定か、慣用句的なものか、等)

等の観点から分類する。

- c. 分類したものの、否定表現と共起している例と共起していない例の用例数をまとめ、比較検討する。（「否定表現と共起」といっても、ある意味当然ながら「同一節内での共起」に限っており「[太郎が気づかないうちに] 二郎が食べてしまった」のようなものは共起と認めない）。

というものである。a, bの作業はほとんど松本が行い、一部問題のあるものについては松本と橋本で協議した。cの用例数の比較検討は橋本と松本とで協議して進めた。（なお調査の立案は主として橋本が行った。）

用例の抽出に関しては、本稿が存在する可能性があると思定した語形（例えば「てしまわー」「てしまいません」）を、エディターソフト等で順次検索し、その後該当例かどうか、どこに分類されるかを判断した。調査結果の誤差については、

- ・分類される箇所によっては用例数が膨大になっており見落としがあり得る。
- ・本稿が想定しなかった語形で該当する例がある可能性がある。
- ・文章では、（主節・従属節の区別等）一部の分類基準は、（筆者の内省判断によるなど）再現可能なほどに示せず、判断のゆれの起こる箇所がある。

等の理由により、一定の誤差は確実にあると思われるが、その誤差は本稿の主要な趣旨を動かさない程度のものであると判断している。

### 3. 調査の結果と考察

#### 3.1. 調査結果(1)

調査結果の概要は、以下の通りである。

- (3) 「てしまう」総用例 11095例

うち、「てしまう」と「ない」「ず」との共起例 116例

「ない」とも「ず」とも共起していない例 10979例

- (4) 「てしまう」と「ない」「ず」との共起例(116例)のうち、

主節内のもの 84例

従属節内のもの 32例

- (5) 「てしまう」が「ない」とも「ず」とも共起していない例 10979例のうち、

主節内のもの 7641 例

従属節内のもの 3338 例

(6) 「ている」総用例 119152 例

うち、「ている」と「ない」「ず」との共起例 4460 例

「ない」とも「ず」とも共起していない例 114692 例

(7) 「ている」と「ない」「ず」との共起例(4460例)のうち、

主節内のもの 3108 例

従属節内のもの 1352 例

(8) 「ている」が「ない」とも「ず」とも共起していない例 114692 例のうち、

主節内のもの 76016 例

従属節内のもの 38676 例

(9) 「ておる」総用例 1822 例

うち、「ておる」と「ない」「ず」との共起例 156 例

「ない」とも「ず」とも共起していない例 1666 例

(10) 「ておる」と「ない」「ず」との共起例(156例)のうち、

主節内のもの 97 例

従属節内のもの 59 例

(11) 「ておる」が「ない」とも「ず」とも共起していない例 1666 例のうち、

主節内のもの 857 例

従属節内のもの 809 例

これらの概観から見ても、

「てしまう」と「ない」「ず」の総共起例 116 例(「てしまう」総用例 11095 例の約 1.0%)

「ている」と「ない」「ず」の共起例 4460 例(「ている」総用例 119152 例の約 3.7%)

となっており、すでに「てしまう」と否定表現とは共起しにくいという傾向は見取れると思われる。より詳細に見ていくと、特に主節において「てしまう」と共起する「ない」「ず」は、ほとんどが命題内否定ではない特殊なものであり、「てしまう」と典型的な否定表現との共起のしにくさは、さらに顕著なものであることが分

かる。この点については3.2.でより詳しく見る。

「ている」に加え、「ておる」について調査したのは、従属節の一部において、「ーていて(連用テ形)」「ーてい、(連用中止形)」「ーていなく(テイル+ナイ連用形)」等、「ている」をもとにした形が殆ど出現せず、それを補う、「ーており」「ーておらず」のような形が、いわば異形態的に現れる場合があることを考慮してのことである。調査結果は、上掲のように、「ておる」の総用例数は「ている」総用例数から見れば圧倒的に少なく、ほとんどの場合、結論に大きな影響が出ないことを確認できるので、以下では、原則「ておる」については除外して考える<sup>\*3</sup>。

### 3.2. 調査結果(2)

次に、主節内に現れた「てしまう」と「ない」「ず」の共起例について、その内部を詳細に見ると、以下のものである。主節内に現れた「てしまう」と「ない」「ず」の共起例 84例の述部語形を、概略的に分類すると、

#### a 「ない」「ず」が慣用句(「～なくてはならない」等)の一部をなすもの：37例

- 「てしまわなくてはならない」：5例
- 「てしまわなければならない」：6例
- 「てしまわねばならない」：6例
- 「てしまわねばならぬ」：1例
- 「てしまわなくっちゃ」：1例
- 「てしまわないといけない」：2例
- 「てしまわなけりゃ(この形のまま文終止)」：2例
- 「てしまわなければいけない」：1例
- 「てしまわないと(この形のまま文終止)」：1例
- 「てしまわないとも(は)限らない」：4例
- 「てしまわぬともかぎらない」：1例
- 「てしまえぬともかぎらない」：1例
- 「てしまうしかない」：2例
- 「てしまうべきなのかもしれなかった」：1例
- 「てしまう(てしまった)かもしれない」：2例
- 「てしまわずにはいられない」：1例

#### b 「～のではなからうか」等、慣用句とは言えないが、出現位置から見て「ない」「ず」がモダリティを担う形式の一部として機能している(命題内否定でない)

もの：40例

「てしまうのではないか」「てしまったのではないか(なかろうか)」「てしまったんじゃないか」等、「てしまう(てしまった)」+「のだ」+「ない」の形、およびその派生形：23例

「てしまうではないか」「てしまったじゃないか」等、「てしまう(てしまった)」+「ではないか」の形、およびその派生形：13例

「てしまいはしないだろうか」：1例

「てしまうはずがない」：1例

「てしまいたく(は)ない」：2例

c その他：7例

というようになる。84例のうち、77例が、少なくとも否定の典型的用例、すなわち、命題の成立を否定する(命題内否定)ではないことが分かる。わずかに「c その他」の7例の中に「てしまう」と典型的な否定の「ない」「ず」との共起例が存在する可能性があるということになる。以下に、その7例全てを引く。(用例末尾の人名が作者名である。作品名は論文末尾の一覧にて確認可能。)

- (12) 「そうきめないで、栄さん」嗚咽しながらおすえはかぶりを振った、「そんなふうにきめ【てしまわないでよ】」[山本周五郎]
- (13) 「そのあいだに、お万阿は齢をとって旦那さまに嫌われ【てしまわないかしら】」[司馬遼太郎]
- (14) 「だけど法学博士なんて、何だか怖いみたいね。康子さん、どう? ……怖くない? ……朝から晩まで法律ばかり考えていて、頭の中は法律だらけの男なんて、愛情が無くなっ【てしまわないかしら】」[石川達三]
- (15) こんなにたくさんの数の人間がどうして真夜中に車で街を走りまわる必要があるのか私には理解できなかった。なぜみんな六時には仕事を終えて家に帰り、十時前にベッドにもぐりこんで電気を消して寝【てしまわないのだ?】」[村上春樹]
- (16) 私はさっきも、あの喧嘩の真っ最中に覚えずその美に撲たれたのみならず、「ああ美しい」と心の中で叫んだのでありながら、どうしてあの時彼女の足下に跪い【てしまわなかったか。】」[谷崎潤一郎]
- (17) 一体こんな事は考えていると、だんだんわからなくなるものだが、まあ一通りは惚れているな。尤もおれの事だから、いくら侍従に惚れたと云っても、

眼さきまで昏ん【てしまいはしない。】〔芥川龍之介〕

- (18) 私だって精通するまでにはずいぶん長い時間がかかった。しかし一度精通してしまおうと、言いかえれば一度そのコツを習得してしまおうと、その能力は簡単に消え失せ【てしまったりはしない。】〔村上春樹〕

以上7例のうち、(13)(14)は、語形上は「てしまわない」を含んで命題内否定の可能性をもっているものの、文脈上モダリティの領域に属していることが明白である。(13)(14)の疑問文は、「・・・てしまうのではないかしら」という形に置き換えることができるので、田野村1988の言う「第二類の否定疑問文」、井上1990の言う「誘導否定疑問文」に当たると思われる。

一方(15)(16)は、疑問詞「なぜ」「どうして」を含む疑問文である。さらに言えば、(15)(16)ともに、反語的色彩が濃厚であるように、本稿筆者には思われる。残る3例のうち、(12)は、命令文で、最後の(17)(18)の「ない」がもっとも命題内否定としては典型に近いということになる。

結論的に言えば、当該資料中、「てしまう」と「ない」「ず」との共起例のうち、「ない」「ず」が命題内否定として働いている例は多く見積もっても(12)(15)(16)(17)(18)の5例である。さらに言えば、(12)(15)(16)3例の「ない」「ず」は命題内否定の真の典型ではない。命題内否定の典型例は、平叙文であろうと思われるからである。平叙文である(17)(18)の「ない」は、当該用例の中では最も典型的な命題内否定であるように見えるが、しかし、それでさえ、「てしまいはしない」という有標な形をとり、「てしまわない」「てしまわなかった」という最も単純な形にはなっていない<sup>4</sup>。言い方を変えると、この、「最も単純な「てしまわない」「てしまわなかった」」のみの形で主節言い切りに現れる用例が、当該資料に1例もない」という事実が、本調査結果の骨子を端的にあらわしている。次に触れるように、「ている」と否定との共起例の最も単純な形「ていない」「ていなかった」は、1000を越える用例を持っており、「てしまう」の特異性を浮かび上がらせている。

比較のため主節内に現れた「ている」と「ない」「ず」の共起例 3108例について、その内部を見ると、以下の通りである。こちらは用例数が多いので、厳密に分類し用例数を出すということができていない箇所も多いが、要所についての概数は動かないと判断している。

- a 「ない」「ず」が慣用句（「～なくてはならない」等）の一部をなすもの：約110例
- b 「～のではなからうか」等、慣用句とは言えないが、出現位置から見て「ない」

- 「ず」がモダリティを担う形式の一部として機能している(命題内否定でない)  
もの：約180例  
c その他：約2820例

こちらは、圧倒的に「c その他」が多い。cの中にも、「ない」「ず」が命題内否定として働いていないものも含まれるが、命題内否定の確例も多数存在する。数多いcの例の全てについて、命題内否定であるものとそうでないものを厳密により分け数値を出すことはできなかったが、命題内否定の確例の一部をなす数値を以下に挙げる。

「ていない」で終止する例 541例

「ていなかった」で終止する例 498例

「ていない。」「ていなかった。」の、それぞれ具体例を1例ずつ挙げる。

- (19) 「大尉はどこへ出張したのかと訊ねても、軍の機密だと云う。いつ帰るのかと訊ねても同じ返答だ。さっきも倉庫に行ってみると、石炭は二日ぶんしか残っ【ていない。】 どうしたらいいか」[井伏鱒二]
- (20) しかし、山本五十六にこういう女がいたという事は、戦前戦中はもとより、戦後も約十年間一般にはまったく知られ【ていなかった。】[阿川弘之]

他に、「ていないらしい」等各種モダリティ形式のついた形や、「ていません」のような丁寧形等、多数の命題内否定の確例があり、厳密な値は出せていないものの、「c その他」の総数の少なくとも過半数は「ない」「ず」が命題内否定として働いていることが確実である。この状況は、「てしまう」が「ない」「ず」と共起した場合とは、明らかに異なっている。

### 3.3. 調査結果(3)

3.1.、3.2.の結果との比較のため、従属節における共起状況を、概略的に見ておく。まず、従属節における「てしまう」と「ない」「ず」との総共起例 32例を挙げる。

- (21) ……蜘蛛の場合とはちがって、ランプの灯が、なにか彼等の種の保存に役立ちうるとも思えない。しかも、燈火以後の現象らしいという点では、まったく同じなのだ。蛾が群をなして、月世界に飛び去っ【てしまわなかったの



が、】その何よりの証拠だろう。〔安部公房〕

- (22) 女が連れ去られても、縄梯子は、そのままになっていた。男は、こわごわ手をのばし、そっと指先でふれてみる。消え【てしまわないのを、】たしかめてから、ゆっくり登りはじめた。〔安部公房〕
- (23) 「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云つ【てしまわないうちに、】「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。】〔宮沢賢治〕
- (24) 定めて最初に着いた舟に世話人がいて案内をしたのだろう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を捜したりなんかして、まだ行つ【てしまわないうちに、】もう次の舟の人が上陸する。〔森鷗外〕
- (25) 「ひっぱりあげてあげられなくてごめんなさい」と彼女は言った。「二人とも下に落っこち【てしまわないように、】そこの岩にしがみついているのが精いっぱいだったものだから」〔村上春樹〕
- (26) (どうにも黙ってはいられない。このことをだれかにしゃべつ【てしまわなくては】落ちつかない)〔池波正太郎〕
- (27) 私はそれを見てから、もうこれをそのままにしておくことはできなくなりました。これを何とかし【てしまわないうちは、】私の足はこの国の土を離れることはできません。〔竹山道雄〕
- (28) 私がどうしてそんなにつづけて結婚なさることになったのかと訊きますと、小堺さんの代わりに父が笑いながら教えてくれました。「はよ結婚式をあげ【てしまわんと、】赤ん坊が生まれてしまうんや」〔宮本輝〕
- (29) 「氏神さまからなら、すぐじゃった。バスがな、ブブーってらっぱならしよって、一本松のとこつつ走ったもん。まんじゅう一つ食う【てしまわんうち】じゃったど。」〔壺井栄〕
- (30) もうすこしは浮世のことも考えなくてはいけないだろう。この世をただ無意義だときめ【てしまうのではなく、】もっと生きていることを大切にしないではいけないだろう。〔竹山道雄〕
- (31) たしかに妻はわたしのその問いに答えてわたしの気持を安らげようとしていたようでした。そもそも妻がやってきたのは、わたしの半狂乱の有様を哀れに思い、わたしの心をふたたび絵に向けさせるため、自分が死ん【てしまったのではないこと】を伝えてわたしを安心させるためだったのです。〔筒井康隆〕
- (32) 「ジャラジャラジャラジャラン。」事務長が高くどなりました。これは決闘を

- しろと云っ【てしまわせない為】に、わざと邪魔をしたのです。[宮沢賢治]
- (33) まだあたりは暗い。私の目がどうかし【てしまったのでなければ】、夜はまだ明けていないはずだ。[村上春樹]
- (34) 母は箸を止めて息子の顔をじっと見つめた。そしてこの子が、もう一人前の(男)になっ【てしまったのではないかと】いう疑いを感じていた。[石川達三]
- (35) あの頃もし家でじっとしていたとしたら、本当に気が狂っ【てしまったのではないかと】思います。[筒井康隆]
- (36) もし転勤を告げたなら、この手はほんとうに生きる力を失っ【てしまうのではないかと】、信夫はその手をそっと包むように握りなおした。[三浦綾子]
- (37) 徳雄はつづいておりて、駅の出口まで来て、乗越料金をはらいながら、ひょっと貞子とそのひまに逃げて行っ【てしまうのではないかと】おもった。[石川淳]
- (38) 嫌だったというのは、母の嫉妬であつたかも知れない。その時から母は、この娘に賢一郎を奪られ【てしまうのではないかと】いう風な、直感があつた。落ちつきのない娘だった。[石川達三]
- (39) 無表情にパンチを振るうフォアマンの姿には、本当にローマンを半殺しの目に会わせ【てしまうのではないかと】思わせるほど、鬼気迫るものがあつた。[沢木耕太郎]
- (40) 大きな桐の紋付を彼は常用していたが、夜はそのまま寝【てしまうのではないかと】疑われるほど、それはよれよれで古びて穢なく、もう幾年も水を通したとは見えず、つまり紋服の態をなしていなかった。[有吉佐和子]
- (41) だから、私はあれ以来、よる、志乃のからだを遠ざけていた。あの夜の悦楽への未練が、志乃の胎内に宿ったばかりのあたらしい命の灯を、心なく、踏み消し【てしまいはしないかと】おそれたからであつた。[三浦哲郎]
- (42) 大將はその美しい惑乱をみると、思い切っても起ちかね、このまま帰ったら、この幸福は煙のように手の中から消え【てしまいはせぬかと】あやぶまれる。[田辺聖子]
- (43) 課長会議でも根本的な問題はなにひとつ討議されず、もし予想どおりに恐慌が発生したら、いままでのどれよりも効果のある毒薬をばらまいておさえ【てしまおうではないかと】いうことで、モノフロール醋酸ソーダの使用法や、それに関する衛生法の制限緩和策が検討されたにすぎなかった。[開高健]
- (44) 宮地さんはひどく参っていた。倒れ【てしまうのではないかと】思われた。ふらふらの状態である。[井伏鱒二]

- (45) 信夫は一年生のとき、根本先生がどこかにお嫁に行っ【てしまうのではないかと】、急に不安になったことがある。〔三浦綾子〕
- (46) 自分の留守が長年つづいたら、こんな人々も、やがては散り散りになっ【てしまうのではないかと】、源氏はふと気弱く思う。〔田辺聖子〕
- (47) 薫は、本来なら、宮たちと同じように扱ってはならない、臣下の身分なのであるけれども、分けへだてしては、尼君の女三の宮が、心の負い目から、ひがまれ【てしまうのではないかと】源氏は気を使っている。〔田辺聖子〕
- (48) 私は目を閉じて眠ってしまったかったが、私が眠っているあいだにドラムが回転を停めてあとから来た誰かが先にそこに洗濯ものを放りこん【でしまうかもしれない】と思うと眠るわけにはいかなかった。〔村上春樹〕
- (49) とうとう来るところへ来たと云うよりも、来すぎてしまったのではなかろうか。僕は自分がその場に坐りこん【でしまうのではないかと】思った。火傷をしている左の頬がびくびく痙攣した。自分でそれがよく分った。〔井伏鱒二〕
- (50) 彼女は眼をつぶっていた。眠ったように静かであった。ふと宮村は彼女はこのまま眠り死ん【でしまうのではないかと】思った。〔新田次郎〕
- (51) 若作りの延津賀とはいえ、それはもう五十の老を告げる顔の皺にびかびか顰をあてて見せるようなもので、染めかえしの色あざやかながらひよっと雨にでも逢えばべちゃべちゃと嘔んだ紙のように縮ん【でしまうのではないかと】、あぶなげなその感じが一面には生活にあやしい美しさを添えてもいた。〔石川淳〕
- (52) 発火点が消えても全体の火には影響を及ぼさなかった。むしろ、その事実気づいて、事態の深刻さを改めて認識したと言える。そして、ついにはこのまま異国の地ミシガンで死ん【でしまうのではないかと】考えるようにさえなった。〔藤原正彦〕

これらの用例中には、命題内否定の用例も多い。本稿の判断では、(21)～(33)の13例を命題内否定と考える。ただし、従属節内に現れている「てしまう」総用例数3370例における32例(約0.9%)という数字は、従属節内に現れている「ている」総用例40028例のうちの、「ない」「ず」との共起例1352例(約3.4%)に比して、相対的に小さいとは言える。また、命題内否定の「ない」「ず」との共起に限れば、「ている」に比べ「てしまう」の方が、共起する比率がさらに下がること予想される(「てしまう」と命題内否定「ない」「ず」との共起は上述のように13例、総用例3370の、約0.39%。ただし既に触れたように、「ている」の用例数が多す

ぎるため、「ている」と命題内否定の「ない」「ず」の共起例の方は、正確な数を出すことができなかった)。

### 3.4. 調査結果のまとめと考察

まず調査結果のポイントを繰り返す。

(53) 主節・従属節ともに、「てしまう」と「ない」「ず」は共起しにくい。

(54) 特に、主節において、「てしまう」が命題内否定の「ない」「ず」と共起する例は、多く見ても僅かに5例であり、それらも2例が(反語的色彩の強い)疑問文、1例が命令文であり、平叙文における例は2例のみである。

本稿が重要と考えるのは以上の点であり、「ている」と「ない」「ず」との共起の調査は、(53)(54)のような結果が、資料の文体特性に由来するとか、もともと日本語の書記資料では否定の出現頻度そのものがこの程度なのではないかというような疑念を排除するためのものである。(53)(54)のような傾向が「ている」には当てはまらないということが、まさに「てしまう」の特異性を示していると言える。「てしまう」は特に主節においては、ほとんど肯定対極表現に近い分布を持っているようである。

では、「てしまう」のこのような状況の原因は何であろうか。現段階では確実なことは言えないが、「否定形でない代替表現があるから」とか「現実世界で起こりにくい／認知されにくいから」というような、極めて個別的な特性によるものではない、という予測がある。

「てしまう」と「ない」「ず」との共起の可否を、母語話者の内省によって求めようとすると、他の比較的明瞭な判定を得られる現象に比べて、なかなか安定した判定が得られないのであるが、それでも「主節・平叙文」というような条件で内省判断を求めると、ある程度のインフォーマントが「やや不自然」という判定を下す。それと同程度と言えるかどうかは確実でないが、「てしまう」以外、例えば「てみる」「ておく」と「ない」「ず」との共起の可否判断についても、それと近い結果が出るようである(無論、当該のタイプの現象に関してはインフォーマントの内省判断だけでは不十分であるからこそ、事例の量的な調査を行ったわけで、「てみる」「ておく」等に関しても、今後事例の調査を行う必要がある。この点については調査中であり、別稿を予定している)。この点を考慮すれば、この現象は「てしまう」に固有のものでなく、少なくとも「てみる」「ておく」等、一部のテ形補助動詞に共

通の、(ある程度)範疇的な特性であるということが示唆される。

この問題とは別に、(53)(54)のような現象から思い起こされるのは、古典日本語（主として奈良・平安時代）における助動詞「つ」「ぬ」の分布である。竹内1986他によって知られるように、助動詞「つ」「ぬ」と否定辞との共起例は極めて少なく、  
「てしまう」をめぐる現象とかなり似ているように見える（ただし、例えば比較可能な他の助動詞の、否定辞との共起数や全用例数における割合などが明らかでなく、不確実な部分を残している）。仮に古典助動詞における「つ」「ぬ」の現象が、(53)(54)の現象と同種のものであったとすると、「つ」「ぬ」が否定辞と共起しにくいことの根拠について、「「つ」「ぬ」が確述という意味を持つから」というような言い方はしにくくなりそうである。「てしまう」に「きっと」というような通常の意味での「確述」という意味を見いだすのは難しそうであるし、まして、「てみる」「ておく」等にも「確述」の意味があるとはさらに言いにくい。ただしもちろん、それは古典語「つ」「ぬ」にモーダルな意味があったという可能性をまるごと否定するものではなく、否定辞との共起のしにくさに関して狭義の「確述」という意味が原因となっているということを、個別に否定するにすぎない。

#### 4. 今後の課題等

【CD-ROM 版 新潮文庫の100冊】を資料にした比較的規模の大きい調査によって、「てしまう」と「ない」「ず」の共起に関して、上のような事実が明らかになった。特に近い将来の課題としては、「てみる」「ておく」と「ない」「ず」との共起に関して同様の調査を行うこと、古典語助動詞「つ」「ぬ」に関しても同様の調査を行うこと等が挙げられる。これらの調査により事実の確実性を増し、現象の性質をより詳細に明らかにすることによって、共起しにくい理由という、より本質的な問題に近づくことができると考える。

本稿は、まず(53)(54)の事実を明らかにすることが重要と考えたため、用例数調査の全てが厳密とは言えず、不完全な箇所も多く残っている。今後新たな知見を得るためには、周辺的な部分に関してもより厳密な調査を行う必要があるかもしれないと考える。

注

\*1 異形態について、「ている」「ておる」については「死んでいる」「呼んでおる」等の「でいる」「でおる」の形を、時間の関係上カウントできなかった。「てしまう」の異形態「でしまう(「死んでしまう」等)」については、全数調査が重要と考えカウントした。

\*2 主節・従属節の区別については、概略以下のように行った。

- ・当該語形(「てしまう」「ている」等)を含む文節が、「。」「」」「?」「!」でマークされている場合は、原則主節とする。
- ・それ以外は原則従属節とする。

微妙な例については、全てを再現可能な形で記すのは難しいが、目立つものを挙げると、

- ・従属節が倒置されていると判断されるものは、文節末が「。」等でマークされていても、従属節とする。
- ・引用マーカー「と」「って」等でマークされる引用節は、従属節とする。節の性質としては、独立性(文らしさ)の高い引用節は主節に含めた方が適切と思われるが、引用節の用例はかなり多数に上り、それぞれの引用節の独立性の高さを一つ一つ判定するのは労力的に困難であるため、一律にこのように処理した。なお、「てしまう」と「ない」「ず」の従属節内共起例については本文中に全用例を挙げてあるので、本稿の最大の眼目である(53)(54)の結論に関しては、引用節の分類のいかんにかかわらず成り立つことが確かめられる。
- ・「てしまうほどだ」のような、「節+形式名詞+だ」で文終止する形は、「のだ」「はずだ」「べきだ」を除き、節が形式名詞を修飾すると見て、従属節の方に入れた。これも判断が難しいところであるが、本稿の趣旨から見て、上記のような処理の仕方で大勢に大きな悪影響は与えないと判断した。

\*3 例えば、「ている」の否定との共起率は上述のように約3.7%である(p.4, 24行目)。「ておる」を「ている」の異形態と見て、「ている」「ておる」と「ない」「ず」との共起率を計算し直すと、(共起総例は4616、「ている」「ておる」総用例120974)約3.8%となり、わずかに高くなるものの大勢には影響ないと判断する。

\*4 「・・・てしまいはしない」形は、具体的にどのようなモーダルな意味を持っているというのは難しいものの、連体節や、いわゆる南のB類節の一部(レバ節等)に収まらないなど、典型的な命題内否定でないことを伺わせる性質を持っている。

\*5 竹内1986は、

- ・・・奈良時代には、「ぬ・つ」の下に否定の助動詞が来る例は見られない。平安時代になると、

見るめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく来る(古今恋三、623) [小沢1971訳：漁師たちは海松布(みるめ)の生えない浦ということを知ら

ないで足を棒にしてしげしげと訪れる。私も人を見る目をもたぬつれない女なの、あなたは毎夜欠かさず求婚にいらっしゃるのだろうか。]

のような否定の意味をもつ助詞「で」のついた例が稀にある。また、

かくながら散らで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく（後撰春下、95）[本船1988訳：こうした満開のままで、散らないで、生涯をたのしんでおわることが、できないものか。桜の花の常磐もある、と見られるように。]

道しらでやみやはしなぬ相坂の関のあなたはうみといふなり（後撰恋三、786）

[本船1988訳：近江路なんて道は、知らないじまいになさなくて!?逢坂の関のあちらは湖（うみ）だ、と言うそうですから一逢う術など知らないじまいになさいましょ。「逢う身になると、すぐ厭きていや気がさす」というそうですから。]

のような反語表現で「ぬ・つ」に否定の「ず」が下接した例もわずかながら見られる。しかし、奈良時代では、「ぬ・つ」は「ず」を下接しないだけでなく、「ましじ」

「まじ」をも下接させていない。つまり、「ぬ・つ」は、否定の意味をもつ助動詞すべてを下接しないのである。・・・（pp.278～279）

と述べる（各原文（和歌）に挿入されている現代語訳は竹内1986の原文にはなく、橋本・松本が引用・挿入した）。古今集623の例は否定辞「で」は命題内否定ではあるが従属節の例であり、後撰集95,786の例は竹内1986も述べるように反語の例で、主節における命題内否定辞との共起例は見あたらない。ちなみに竹内1986は、「ぬ・つ」が否定辞と共起しにくいことの原因としては、控えめな表現ながら、「私は、おそらく、「運動性」の動作の展開する様態をあらわす本来の「ぬ・つ」の性質が、否定とは結びつきにくかったためであると思う」と述べている。本稿はこの見解についての態度は保留したい。

奈良時代の例については、（竹内1986は直接承接していないので該当例とみなさないが）、管見のかぎりでは以下の1例のみである。

常人の恋ふといふよりはあまりにてわれは死ぬべくなり（万葉集4080）

[小島・木下・佐竹1975訳：世の人が恋い慕う情になおましてわたしは死ぬばかりになったではありませんか。]

この例も「死ぬばかりに（死ぬほどに）なってしまったではありませんか」というような、モダリティ内否定の例である。

## 参考文献

- 井上和子 1976『変形文法と日本語(下)』大修館書店  
井上優 1990「「ダロウネ」否定疑問文について」『日本語学』9-12  
太田朗 1980『否定の意味』大修館書店  
小沢正夫(校注・訳)1971『古今和歌集』小学館日本古典文学全集  
木船重昭 1988『後撰和歌集全釈』笠間書院  
小島憲之・木下正俊・佐竹昭広(校注・訳)1975『萬葉集(4)』小学館日本古典文学全集  
杉本武 1991「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』4  
杉本武 1992「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』5  
鈴木智美 1998「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97  
竹内美智子 1986『平安時代和文の研究』明治書院  
田野村忠温 1988「否定疑問文小考」『国語学』152  
丹保健一 1981「否定表現の文法(2) 副詞と否定辞との係わりをめぐって」『三重大学教育学部研究紀要(人文社会科学)』33  
中右実 1994『認知意味論の原理』大修館書店  
飛田良文 1972「完了の助動詞」『品詞別日本文法講座』明治書院  
南不二男 1974『現代日本語の構造』大修館書店  
森田良行 1977「しまう」『基礎日本語 1』角川書店  
守屋三千代 1994「シテシマウの記述に関する一考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6  
Kato, Yasuhiko 1985 Negative Sentences in Japanese. Sophia Linguistica 19, Sophia University.

## 用例資料

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(発行：新潮社／発売：NECインターチャネル)所収の、日本人作家による67作品全て。以下、作家名(五十音順)・作品名(文庫のタイトル)の順で示す。

赤川次郎「女社長に乾杯!」、阿川弘之「山本五十六」、芥川龍之介「羅生門・鼻」、安部公房「砂の女」、有島武郎「小さき者へ・生まれ出づる悩み」、有吉佐和子「華岡青洲の妻」、池波正太郎「剣客商売」、石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」、石川啄木「一



握の砂・悲しき玩具」、石川達三「青春の蹉跎」、泉鏡花「歌行燈・高野聖」、五木寛之「風に吹かれて」、伊藤左千夫「野菊の墓」、井上ひさし「ブンとファン」、井上靖「あすなろ物語」、井伏鱒二「黒い雨」、遠藤周作「沈黙」、大江健三郎「死者の奢り・飼育」、大岡昇平「野火」、開高健「パニック・裸の王様」、梶井基次郎「檸檬」、川端康成「雪国」、北杜夫「楡家の人びと」、倉橋由美子「聖少女」、小林秀雄「モオツァルト・無常という事」、沢木耕太郎「一瞬の夏」、椎名誠「新橋烏森口青春篇」、塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」、志賀直哉「小僧の神様・城の崎にて」、司馬遼太郎「国盗り物語」、島崎藤村「破戒」、曾野綾子「太郎物語」、高野悦子「二十歳の原点」、竹山道雄「ビルマの竖琴」、太宰治「人間失格」、立原正秋「冬の旅」、田辺聖子「新源氏物語」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、筒井康隆「エディプスの恋人」、壺井栄「二十四の瞳」、中島敦「李陵・山月記」、夏目漱石「こころ」、新田次郎「孤高の人」、野坂昭如「火垂るの墓」、林芙美子「放浪記」、樋口一葉「にごりえ・たけくらべ」、福永武彦「草の花」、藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、星新一「人民は弱し 官吏は強し」、堀辰雄「風立ちぬ・美しい村」、松本清張「点と線」、三浦綾子「塩狩峠」、三浦哲郎「忍ぶ川」、三木清「人生論ノート」、三島由紀夫「金閣寺」、水上勉「雁の寺・越前竹人形」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、宮本輝「錦繡」、武者小路実篤「友情」、村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」、森鷗外「山椒大夫・高瀬舟」、柳田国男「遠野物語」、山本周五郎「さぶ」、山本有三「路傍の石」、吉村昭「戦艦武蔵」、吉行淳之介「砂の上の植物群」、渡辺淳一「花埋み」

（2000年7月22日 受理）